

京都市におけるコンビニエンス・ストアをめぐる意識調査

— 都市における公／私概念の再構成に向けて —

A Sociological Investigation on Convenience Stores in Kyoto:

Toward a Reconstruction of a General Concept of "Public / Private" in Urban Spaces

石井和也（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

【メンバー】

鵜飼大介（京都大学大学院人間・環境学研究科 助教）

柴田悠（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員）

西川純司（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

銭廣承平（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

松谷実のり（京都大学大学院文学研究科 修士課程）

【ねらいと目的】

現在日本各所において、コンビニエンス・ストア（以下 CVS と略記）の営業時間短縮（深夜営業の禁止）が議論されている。特に、京都市においては活発な議論が見られ、その模様は各種メディアを通じて頻りに報道がなされている。本研究では、行政が CVS の営業時間を規制し市民の日常生活に介入しようとするとき、そこには、行政・CVS 経営者・CVS 利用者のそれぞれが、都市における公的空間と私的空間をどのように捉え、また、現代社会においてそれらの空間がどのように編成されているのかという問題が顕在化すると考える。というのも、CVS は、①同質性を前提とし、各地に遍在していることに特徴があり、②また、ワンルームに居住する単身者の利用形態に象徴されるように、CVS は「自分の冷蔵庫（の延長）」としても捉えられる。このことは、従来は公的空間とみなされていた都市の各所に、同質性に支えられ、容易に安心感を得ることができる私的空間が拡散していることを意味する。したがって、かつては公／私明確に峻別可能であった都市において、現代では、両者を空間的境界として峻別することは困難であると考えられる。そこで、近代家族を前提とする従来の公／私ありかたが、現代の都市においてどのような変容が見られるかを明らかにするために、本研究では CVS 営業時間規制をめぐる議論の賛否から人びとの CVS 観を明らかにすることで（主にインタビュー調査による）、都市における公／私概念の再構成を目指す。

【活動の記録】

<ワークショップ>

2009年1月12日

石井和也 “A Sociological Investigation on Convenience Stores in Kyoto: Reconsideration of a General Concept of "Public / Private" in Urban Spaces” Global Center of Excellence at Kyoto University for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia Next-Generation Workshop

<調査>

2009年3月3日～5日 調査者：石井・鵜飼・西川・銭廣・松谷 調査地：東京

調査目的：CVS オーナーへのインタビュー調査

3月10日～12日 調査者：石井・柴田・松谷 調査地：神奈川・千葉

調査目的：CVS オーナーおよび店長へのインタビュー調査

3月11日 調査者：西川 調査地：京都

調査目的：京都市へのインタビュー調査

【成果の概要】

本ユニットの成果は、主に以下の三点にまとめることができる。

<資料の収集・分析>

CVS 関連専門誌を可能な限り収集し、そこで展開されている言説を時系列的に分析した。『月刊コンビニ』は出版社在庫保有分の69冊すべてを入手し、さらに、国立国会図書館において、『月刊コンビニ』の前身となる雑誌記事、および『フランチャイズエイジ』等の雑誌記事を大量に収集し、検討してきた。今回のユニットに限らず、CVS を題材として研究を進める際には、貴重なアーカイブとしても役に立つと思われる。

<インタビュー調査>

日本フランチャイズチェーン協会、CVS 各社の本部、CVS オーナー、京都市へのインタビュー調査を依頼した。日本フランチャイズチェーン協会や CVS 各社の本部にはインタビュー調査を断られてしまったが、その断り方に、24 時間営業規制に対して極めて大きな危機感を抱いているということが読み取れた。また、CVS オーナーへのインタビュー調査は、コミュニティストア、ミニストップ、ハッピーローソン、セブンイレブン（セブントウン）といった店舗にて実行できた。それぞれ一時間程度のインタビューであり（中には三時間を超すものもあった）、生の声を聞き続けることで、画一性を念頭に置いた従来の CVS イメージは突き崩され、今後の CVS の展開を考える上で貴重な資料となっている。また、京都市へのインタビューにおいては、CVS に対する行政の対応が一枚岩ではないことが確認され、今後の行政の取り組み（CVS と行政との協力関係）について、その展望を確認することができた。

<社会への還元>

以上の手続きにより、本ユニットは理論的な結論を導き出すとともに、現代社会に対して一定の実践的な価値を持った結論を導き出す。それは当然、CVS を「上から目線」で断罪するものなどではなく、CVS に関わる人々と持続的に CVS の現状・将来について考えていくことができるような土壌を作り上げることである。次世代ワークショップや各種学会での発表等も含め、冊子や口頭などにより、インタビュー調査に協力してくれた方々へ成果を報告していくことになる。